

# 益田市の現状課題と未来への展望

本田 行信

大正大学 地域構想研究所 益田支局  
(島根県益田市)

益田市は日本海と中国山地に面し、総面積の大半を林野が占めている。中央部には清流日本一に輝いた実績を持つ高津川があり、水質の良さをもたらす鮎やモクズガニといった豊かな恵みを与えてくれている。また柿本人麻呂、雪舟といった文化人の終焉の地であり、中世の山陰地方を知るための資料として非常に価値のある武家文書『益田家文書』（東京大学史料編纂所に所蔵）で知られる益田氏の拠点だった。鎌倉時代に雪舟の作った庭は、萬福寺、医光寺にあり、益田の観光資源だ。また中世のみならず、幕末の第二次長州征伐（石州口の戦い）の舞台、扇原関門などの史跡や伝統文化、石見神楽の継承が熱心にされており、自然や文化、歴史など資源豊富な町である。

しかし大学進学等による若年層の都市圏流出、高齢者の増加による人口減少は確実に進み、平成25年4月には50,000人いた人口も平成30年12月末では47,000人を割り、人口減少に歯止めをかけることは、昨年と変わらず重要な課題の一つとなっている。

そんな中、益田市では平成27年に「益田市総合戦略」を策定し（平成29年11月一部改訂）、「ひとづくり」を総合戦略を貫く大きなテーマと位置づけた。それに伴い平成28年3月には「益田市ひとづくり協働構想」を策定し、生涯各期における実施施策やテーマを明確にしている。平成29年7月には、大正大学と人材育成や地域活性化に向けた町づくりなどの諸分野において相互協力をすすめる旨の連携協定を結んだ。地域創生学部生の実習受入を開始したことは、益田市にとって非常に意義のある出来事となった。

益田市は大正大学だけでなく、島根大学、島根県立大学とも連携協定を結んでおり、人材育成や

共同研究、まちづくり等の分野で相互の協力体制が整備されている。連携協定は結んでいないものの、東洋大学や奈良大学、広島大学等のゼミや学生が個人で益田市内の各地にて研究を行うなど、そこで暮らす地域住民と共に問題解決に取り組むといった活動も行われている。世代や出身地、住んでいる地域等の違いを超えて「この街に何ができるのか」「ここをどうしていくか」を考え合い、学び合う環境が整いつつある。

各大学との連携が進む中、大学生や高校生、地域住民や働く人々が集い、学び合い、高め合うための拠点を整備する計画が進んでいる。【益田の未来・魅力化推進拠点事業】と銘打たれたこの試みは、大正大学をはじめ、大正大学地域構想研究所、株式会社ティーマップ等の各機関の協力を得ながら、「産・学・官・民」の連携拠点となるような場所を目指している。現在、整備が計画されている場所は、鎌倉時代以降に益田市の中心となっていた歴史文化遺産の多い場所であり、周辺には保育所、幼稚園、小学校、中学校、3校の高等学校も点在している。観光資源になりうる資源が身近にあることで、その価値や活かし方についての再検討を行うなど、世代間交流を図るには適した場所となる。また益田市民が学びの場として活用できるよう、サテライトキャンパスとしての活用や、市民の集うサード・プレイスとして役割を担うことも期待されている。

前述の通り、益田市は人口減少を最重要課題としなくてはならない状況にあるために、①定住の基盤となるしごとをつくる、②結婚・出産・子育ての希望をかなえる、③益田に回帰・流入・定着するひとの流れをつくる、④地域にあるものを活かし、安心して暮らせるまちをつくる、といった

4点を総合戦略の基本目標に定めている。この基本目標に沿いながら、人口減少問題をはじめ、仕事や生活の諸問題について、拠点に集う人たちが連携し、知恵と力を結集しながら様々なアプローチを仕掛ける。そこに次世代を担う高校生や大学生が参画することで、経験や考え方を身に付けていく。上記の4つのテーマを実現するために必要なことは何かを多方面から検討し、異世代の感覚や経験を紡ぎ合わせ、より良い事業を展開する。

「産・学・官・民」の4者が集う拠点を整備することで、今の益田にない事業や取り組みが生まれることを期待せずにはいられない。もちろん4者が集うことの難しさや4者の取り組みをいかにとりまとめ進めていくか等については、まだまだ問題山積であるが、この事業を支援してくださる多方面の協力者の力をお借りしながら前進させていく所存である。

さらには「益田市ひとづくり協働構想」にある『生涯各期において、「学び」、「考え」、「経験し」各自の新たな方向を選択する』という目標を実現するためにも、そして昨年の前号で紹介した【新職場体験】という仕掛によって、中学生に芽生え始めた『益田への回帰』のきっかけをさらに強固なものにするためにも、この拠点整備を着実に進める必要がある。「ひとづくりのまち益田」をさらに前進させるために必要な拠点整備事業を計画通りに進めていくことが、今後の大きな目標である。

以上